
しない殺し屋。

Sagittar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

しがない殺し屋。

【Zマーク】

N1123E

【作者名】

Sagittar

【あらすじ】

殺し屋に両親を殺された少年。殺した奴に復讐するため、もう自分のような者を生まないようにするため彼が就いた職業は「殺し屋」。

プロローグ

人は死ぬ、こんなにも簡単に。

父さんと母さんを殺したのは、たつた5センチほどの鉄の塊だった。
いや、それを撃つた人間か？
殺される理由なんてなかつた。
殺されていいわけなかつた。

だけどそんな父さんと母さんを“奴”は殺した。

許せない、許してはいけない。
だけど、どうしたら“奴”に復讐できる？

「警察官になれ」

俺の親戚はそんなことを言つた。

警察に入つて“奴”に復讐できるわけがない。

“奴”は殺し屋だ。

自分が「殺した」なんて証拠は残すはずがない。
だったらどうすればいい？

そう、俺も「殺し屋」になればいい。

「武田さん、何か言い残す」とはないですか？」

俺はそう言つて銃を向ける。

「やめろー。俺はまだ死にたくないー。」

もう慣れたことだが、いちいち説明するのめんどくさい。

「待つてください、俺はあなたを《この世から消す》が《殺し》はしません。」

想像どうり相手は訳がわからない、といったような顔をする。

「あなたを《殺した》ことにして、仕事を終えるんです。あなたはこの世からいなくなつたことになり静かに生きていかなればならなくなりますが、少なくとも生きていられる。1週間ほどしてから海外にでも逃げればいい」

「お前は殺し屋じゃないのか？」

「ああ、じゃない殺し屋さ・・・」

プロローグ（後書き）

この小説はハードボイルドな殺し屋ストーリーではありません。少年が復讐、そして本来殺される人物を助ける物語です。

第1話・殺さない殺し屋

「仕事、終わりましたよ
俺は依頼主にそう言つた。

「わづか……で、奴をどうした?」

そう聞かれたので俺は

「海に沈めておきましたよ。これで奴は《死んだ》のではなく《行
方不明》として扱われますよ」

と、言つておいた。

「くくっ・・・これで私は奴の会社の社長になれる・・・」

まつたく・・・本当に死んだほうがいいのはこうこう奴らじやない
か。

「金は指定の口座に振り込んでください」

「ああ、わかっている。2000万だつたか?」この程度の金で人を
殺すとはな・・・

《この程度の金》で殺すよつとつたのは誰だ?

「仕事ですからね」

そう言い俺は電話を切つた。

「なんでこんな危険なことをしているんだ？私が死んでいないとばれたら君はおそらく殺される」

それきまで銃を向けられて怯えていた武田さんが話しかけてきた。

「俺が『殺さない殺し屋』をしている訳は言えません、でも俺にはやらなければならぬことがある。たとえどんな困難が待ち受けていようと」

そう、俺がこの仕事をしている理由は復讐のためだ、俺のよつなのを生むためではない。この仕事は時にチームで殺しをおこなうことがある。この仕事をやっている者は少ないので、いすれ『奴』と同じチームを組むときが来るだろう。そのときが来るまで俺は『殺さない殺し屋』を続けなければならない。

「そうか・・・でもありがとう。君みたいな人がいたおかげで私は死なずに済んだ」

そう笑顔で言われると、やりきれなくなつた。たしかに死なずに済むかもしれない。だが、これから的人生はむちゃくちゃになるはずだ。今まで築いてきた人間関係がすべて壊れ、孤独に生きていかなければならない。俺は死者は作らなかつたが、『生ける屍』とも言つべき者をつくつてしまつた・・・

「あなたにはこの『殺し』の報酬金をお渡しします。これで少しは楽になるでしょう」

「そんな金、もらつてもいいのかい？」

「…………」

「何から今まで本当にあつがとつ。君の名前だけでも教えてくれないか？」

「神城……かみしろけんじ神城賢一」

第1話・殺さない殺し屋（後書き）

今回は、殺さないことの問題点に触れてみました。
死んでるようになっていくのか、いつそのこと死んでしまうのか。
いつたいどちらの方がその人にとって『正しい』選択なのでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1123e/>

しがない殺し屋。

2011年1月13日08時27分発行